

「但馬むしの会」発足 に寄せて

高橋 匡

「但馬むしの会」が豊高生物部OBの遠藤知二君（北海道大学）や石田達也君（鳥取大学）等のほん走によって昨夏誕生し、今春会誌を創刊されるに臨んで、所愿の一端を述べて会の発展を祈念する。

但馬は中国山脈の東端に位置し、米ノ山、鉢伏山、瀬川山、扇ノ山など1000m級の山が深い溪谷をつくり、変化に富んだ自然環境をつくり出している。いっぽう本州東北部から中部にかけて連なる背梁山脈は京都比叡山系の線で切れて、丹波高原となり、兵庫県においては900m以下の比較的低い山塊を隔てて瀬戸内の自然と裏日本山陰の自然とが、ほとんど繋っているという特殊性をもっている。従って植物相も多彩で分布の面限または東限とされる種も少なくない。北端は日本海に面し、これに向かって円山川、竹野川、佐津川、矢田川、岸田川などの河川が流れ、その流域に集落が形成されている。平地が少なく、山々に妨げられて交通が不便で、めぼしい産業もない但馬は兵庫県の僻地とされ、若い人達は都会にあこがれて流出し、過疎化の著しい地域であった。

しかし、都会の環境悪化が益々深刻化し、脱都会の傾向がしだいに強まり、観光ブームの影響や自然食品への指向などによって但馬を訪れる都会人の数が漸増し、但馬は観光主導型の開発時代を迎えた。それに伴って観光道路の建設、ゴルフ場その他の観光施設の建設、山林、耕地の宅地転用が急速に進められた。長い間、「陸の孤島」とよばれてきた村々に立派な舗装道路が通じ、家々は民宿に変わった。確かに但馬の人々の現金収入は増し、生活水準も都市のそれに一步步近づいたようにみえる。だが、その代償として但馬はかけがえのない貴重なものを

失ってしまったのではなからうか。

昭和28～29年頃、鉢伏高原の春は眼のさめるような若草が萌えていた。アズキコロガシから地蔵堂を経て氷ノ山越えに至る山道の初夏は生い茂る広葉樹の若葉の隙間からもれる陽光が敷きつめた落葉を明るく照らし、飛びかう昆虫の翅音もにぎやかで、目前にそび立つ氷ノ山の北面はブナの原生林で埋められていた。昭和32年頃、裏妙見はまさに深山幽谷の趣きを呈し、トチの大木が谷を埋めていたし、三川山はブナの原生林におおわれ、一部伐採がはじめられたばかりであった。馬ノ山は戦時中疎開の人達が拓いた畑ヶ平開拓村に井戸さん一家が残っていてワサビ作りをしていた。周囲はブナの巨木にかこまれ、各種の鳥がさえずっていた。当時、浜坂から畑ヶ平に達するには殆ど一日かかりであった。

今は、大幹線林道が村岡から清川山、鉢伏山を経て氷ノ山の中腹を大段平めかけて延びつつあり、馬ノ山畑ヶ平は黒取県若桜へ抜ける幹線林道の沿線であり、妙見林道は金山峠を経て蘇武岳から三川山へ、そして香住方面へ通じようとしている。そのほか、大屋町の横行林道、小代溪谷から黒取へ抜ける林道、春采峠に通ずる新園道、兎和野野外センターに向かう道路、大岡山ゴルフ場に通ずる道路、但馬の山や谷は道路で埋めつくされるばかりである。山や谷ばかりではない。日和山から竹野に通ずる第一但馬海岸有料道路、切浜から佐津に通ずる第二但馬海岸有料道路をはじめ、但馬海岸のほとんど全域にわたって海岸道路が伸びている。これらの道路工事によって破壊された自然は計り知れない。道路工事ばかりではない。紙パルプ資源の不足に伴うブナの需要増大と、木材価格の騰貴によるスキ、ヒノキ林の拡大、高冷地野菜の生産拡大に伴う森林の耕地化、スキー場やゴルフ場の増設などによって自然林は急激に伐採された。20年たらずの間に但馬の山々は殆ど伐りつくされ、昔ながらの原生林と称し得るものは、ごく限られた地域の、ごく限られた面積に、まるで見本園のように孤立してとり残されているに過ぎない。果たしてこれらの原生林がいつまで生き残れるものか。極めて疑問である。

かつてアカマツ林の伐採によって営巣地を奪われたコウトリは絶滅の危機に迫いやられた。いま、ニホンザルやイノシシは住みか原生林を奪われて、生きのびるための食物も得られなくなり、追退きわまって危険な人里にあらわれ作物を荒らす。果たして人間にこれらを利用し、シシ害と決めつけて集団捕獲や射殺を繰り返す権利があるのだろうか。「イヌワシの1羽や2羽と人間の生活とどちらが大事だ」と思っているか。」と聞き直る人達の中には果たして独善的なエゴはないのであろうか。ここまですべて虫屋のはしぐさを以て任じる私が大変残念に思ふことは、これ程までに自然が破壊される前に充分な記録がとれなかつたことである。いろいろ理由はあるにしろ、環境の変化によって、今となっては決して得ることのできない種も少なくないであらうことを思うと残念でならないのである。

私が但馬の昆虫相について関心をもち始めたのは昭和29年頃であるが、当時はまだ但馬の昆虫相についての文献や報告はあまりなかつたのではないかと思う。高橋寿郎氏が文献にあげられている昭和12年、『昆虫界』という雑誌に発表された北村運明氏の「兵庫県出石郡神美村で採集した蝶とコガネムシ」などは最も古いものと考えられるが、北村氏が但馬の人なのかどうか、何種ほどの記録があるかも知らない。昭和28年、『兵庫生物』Ⅱ・3に岩田久二雄（膜翅目）、奥谷禎一（膜翅目）、永富昭（鱗翅目）、中根猛彦（鞘翅目）各氏の「氷ノ山の昆虫」と題する報告があるが、これは前年おこなわれた兵庫県生物学会採集会の結果をまとめられたものであって、私が知っている最も古い記録である。昭和29年には『兵庫生物』Ⅱ・4~5に奥谷禎一氏の「但馬・氷ノ山の昆虫」が報告されたが、これも生物学会採集会の記録であって、8月18日と季節のおそいせい、セミ5種、カミキリ5種、ハバチ5種とトワダオオカの記録がある。同じ号に高橋寿郎氏の「兵庫県産養虫類について（第一報）」があり、生野、湯村、大久保村、福定などが採集地として記録されている。『兵庫生物』Ⅲ・1~2（1955）には山本義次氏の「氷ノ山の蝶類について（第一報）」、山本広一

氏の「但馬氷ノ山の蝶」、吉阪道雄氏の「氷ノ山の蝶類」としだいに氷ノ山の昆虫相に関する報告がふえてくる。扇ノ山の昆虫相についてのまとまった報告としては昭和35年に発行された兵庫繁文（現在は神戸大学文学部）の『生物研究部誌』創刊号が最も古いものだろう。主として植物、蝶類、甲虫類についてまとめている。続いて2号、3号と辻啓介氏を中心とする生物研究部の扇ノ山の昆虫相についての報告がなされている。相原高校生物研究会は昭和29～33年の5年間、氷ノ山の昆虫相調査を続け、会誌『NATURA』16号に「氷ノ山特集号」を報告、ついで34年から扇ノ山昆虫相調査をおこない逐次会誌に報告している。こうして昭和30年代にはいつてから但馬の昆虫相に関する報告は競々とふえてきたが、その殆どが地元以外の研究者によるものであって、調査地域も氷ノ山、扇ノ山に集中していた。

その中で、当時大屋町面谷小学校教諭であった中尾淳三氏が氷ノ山および杉ヶ沢、若杉峠を中心に生徒とともに採集された蝶類の目録を昭和34年、相原高校生物研究会誌『NATURA』16号に発表され、当時関宮中学校教諭であった面村登氏が昭和36年『兵庫生物』に八木川水系の水棲昆虫について記録されている。そのほかにも但馬の人で但馬の昆虫相について研究された人もあるかも知れないが、そうした報告を見たことがない。

私は相原高校生物研究会の採集会や兵庫県生物学会の採集会に参加して氷ノ山、妙見山、扇ノ山などの昆虫をみつめながら、何とか但馬人の手で、但馬の昆虫相をもう少し正確につかみ、記録することが必要だと思えるようになった。一部の高い山ばかりでなく、低い山も海岸も平地も河川も住居地域も、すべてにわたって調査してみなければ本当の昆虫相はつかめない。そして、それは但馬に生まれ但馬に育ち、但馬に住む者でなければできない仕事だと思った。幸い昭和38年4月、出石高校に転任になったので、さっそく出石郡の標本をみつめにとりかかった。生物部と私の採集だけでは能力が及ばないのでもう1年生の夏休み課題として昆虫標本を課して協力してもらった。その結果は「出石郡昆虫図録」第1報および第

之報として報告した。昭和42年より豊岡高校に勤務するようになった生物部の諸君とともに豊岡周辺はもとより、栗田山、大岡山、金山峠、蘇武岳、三上山、妙見山、本坂山、氷ノ山、鳳ノ山と県集を繰り廻し、相当数の標本をあつめたので、この一冊で一度目録をまとめておきたいと考え、私の個人的にあつめた標本箱30箱（甲虫類）および関係文献資料等、すべて研究室に運んで整理にとりかかっていた昭和47年10月4日、学校火災により一夜にして灰じんに帰してしまつたのである。

その後、学校再建の糧資と生物部諸君の若いエネルギーに支えられて、もう一度資料のつくり直しをしようと思ひ、今日まで努力を続けている。生物研究室には新しい標本箱が60箱用意され、すでに半数以上が標本で埋まっている。「豊岡高等学校昆虫標本目録」は今回第4報を報告する運びとなり、記録した種は1,500を越えた。しかし、但馬昆虫相の全容を明らかにするには、まだまだ程遠い。しかも、日一日と昆虫の住みかは破壊されてつめるのである。

現在、但馬に住む人、特に中・高生の中に昆虫に興味をもち、実際に採集活動をやっている人も少なくないと思ふ。毎年8月、但馬文教府で「植物・動物・岩石同定会」が開かれるが、時々すばらしい昆虫標本をもちて来て驚かされることがある。だいたい以前のことであるが、系井中の一生徒が立派な標本をもちてきた。驚いたことに、その中にギバリハムシの標本が1頭あった。この種は外来種でハムシ科中世界最大、宝石のように美しい甲虫であり、はじめ六甲山系のみで見られたが、その後氷上郡で発見され、播州でも1~2カ所みつかると分布の拡大がみられるのである。いずれ但馬にもはいつてくると期待していたものである。その標本は少年が特に大事にしている様子なので無理にもり取らなかったが、採集地は系井となつていたことくらいはデータは焼失して調べようもない。その後何年かたつたが、新聞に聞取町のある高橋ギバリハムシ多数（福か、真）を阪神方面からの採集者がみつけたことを報道している。

また、数年前文教府に来た（坂中（現在浜坂高）の磯

野呂弘昌もすばらしい甲虫の標本をもってきた。彼は洪水時の荒木上から、あるいは海浜の砂地から特異な種を
あつめている。しかし、これだけの貴重な資料が単なるコレク
ションに終わり、まともな記録として公表されな
ければ世のモチ腐れ以外の何ものでもない。また、報告
も固定の正確さがなければ資料としての価値はなく、か
えって混乱を招くばかりである。

この度「但馬むしの会」が発足し、同好の士が互いに
連繋を深めながら協力して郷土但馬の昆虫についての知
見を積上げようとすることは誠に喜ばしいことである。
そしてその具体的な礎石としてこの会誌が創刊されるこ
とを心から祝福するとともに、会の発展にともなう会
誌が充実して単なる同好誌ではなく公式の研究発表誌と
しての實力をもったものに育てあげてほしいと願うもの
である。「継続は力なり」これは柏原高校にいた頃、大
先輩松山確郎先生から教えられたことばである。いった
ん出版した以上、石にしがみついても継続する執念があ
れば必ず實力はついてくるものなのである。

(たかはし ただす・豊高教諭)

＊

＊

＊

我々の課題

石田達也

但馬の生物はまだまだわかっていない。そう思う。ま
ったく何がでてくるか、本当に訳のわからないところだ。
ぼくは現在、鳥を主に観ているので、鳥の話になるが、
豊岡市六ツ[ろっぽう]田園*が今のところ西日本で唯一のガン
(マガン)の「繁殖果地」になっていたり、標高わずか1,300
メートルの山頂付近に、みづう信州など

*内山川を、市街地の東方に広がる田園地帯。